

# 早稲田大学の日本語学習者が育むべき 「アカデミック・コンピテンシー」とは何か

尹 智鉉・寅丸 真澄

キーワード：アカデミック・コンピテンシー，キャリア教育・支援，文献調査，アカデミック・ジャパニーズ，学士力

## 1. はじめに

19世紀ドイツ以来のフンボルト的大学観は日本の大学のあり方に大きな影響を与えてきたとされる（金子 2009）。そのため、主として少数エリートに対する教育を想定し、各専門分野の研究者による研究成果の披瀝が最高の大学教育であるとする考え方が根強かった。一方、現代社会においては、大学が担うべき使命として、公開講座や産学官連携等を通じた社会的貢献など、以前よりも社会に開かれた役割への期待も高まりつつある。いくつもの時代的要望に応えるべく、既に多くの大学において学びの再定義と教育の再構築への取り組みが開始されている。では、大学の本来的な使命である「教育と研究」は、今後どのように再定義・再構築されるべきなのだろうか。

その主軸の一つとなるのが「大学の国際化」である。大学の国際化に関しては、留学政策や教員養成、教育課程の変革など様々な観点から論ずることができるが、本稿では、日本の大学の国際化を支え、牽引する日本語教育、世界中から多様な人材を獲得し、育成するための日本語教育に焦点をあて、考察を行うこととする。

現在、日本の大学における「教育と研究」の場面、すなわちアカデミックな場面には多様な言語的・文化的背景を持つ日本語話者が参加・参画している。社会的諸状況から、今後この傾向はますます顕著になると予測される。例えば、早稲田大学の事例だけを見ても、既に21世紀の初頭から「Waseda Next 125」を策定し、様々な改革を遂行してきた。現在は2032年に向けた「Waseda Vision 150」を掲げ、学生がどのような教育・研究環境のなかで、何を身につけて自己実現を果たし、社会と世界に貢献していけるように教育・支援できるかという共通課題に対し、全学的な取り組みが推進されている。そのなかで重要なキーワードの一つが大学の国際化である。早稲田大学の国際化を志向した取り組みの一つとして、2032年までに1万人の留学生受け入れを目標に掲げている点が挙げられる。

以上のような学内外の状況に鑑み、執筆者らの所属機関である「日本語教育研究センター（Center for Japanese Language；以下、CJL）」では、留学生のアカデミック・キャリアおよびビジネス・キャリアを支援することを目標に、新たなコース開発に着手した。本稿では、コース開発のための第一歩として実施された文献調査の結果の一部を、アカデミック・キャリアの観点から整理し、報告する。その内容を踏まえたうえで、学内の日本語教育を一元的に担っているCJLにおいて日本語学習者を対象とした、必要かつ実現可

能なアカデミック・キャリアの支援および教育について検討する。なお、ビジネス・キャリアへの支援および教育に関する考察は別稿に譲る。

## 2. 文献調査の概要

本調査の目的は、基礎的文献調査を実施することで、日本語学習者がアカデミック・キャリアを形成するために必要とされる能力・資質に関する概念を精緻化・明確化することである。実際には、WEB 基盤調査による3種類の資料収集を行った。(1) 文部科学省を中心に、関係する各省庁および公的機関の資料における「アカデミック・ジャパニーズ」、「学士力」に関する言説の収集、(2) 各種論文データベースでの「アカデミック・ジャパニーズ」関連の論考の収集 (3) 各高等教育機関における「アカデミック・ジャパニーズ」関連科目の概要に関する情報の収集である。

データ収集における第一キーワードはアカデミック・ジャパニーズ (Academic Japanese) である。これは本来、学術的日本語または研究のための日本語などを意味するものである。だが、2002 年より「日本留学試験」が実施され、日本語シラバスや出題範囲との関連からアカデミック・ジャパニーズとは「日本の大学等で教育指導を受けるのに必要とされる日本語の能力」(日本学生支援機構「日本留学試験シラバス (出題範囲)」) であると表記されて以来、最も一般的な定義の一つとして使われている。ただし、この定義は日本留学試験の受験者に対する説明の一部であったことから、あくまでも狭義の意味であると捉えたほうが妥当であると考える。

したがって、今回の調査では、4 年制大学またはそれに相当する水準の教育機関を卒業する人物が最低限身につけておくべき能力を意味する「学士力」の概念からも情報収集を行い、日本語学習者が育むべきアカデミック・コンピテンシーおよびそのための教育・支援について包括的な考察を試みた。なお、先述した通り、本調査の目的はアカデミック・コンピテンシーに関する概念の精緻化・明確化であることから、収集された資料を対象とした定量的分析は行わず、①概念の定義に関する整理および知見の統合、②下位分類・要素の抽出および項目の整理を中心に文献調査の結果をまとめる。

## 3. 調査結果および考察

### 3-1. 日本の大学における日本語学習者のアカデミック・キャリア形成

日本の大学で学ぶ日本語学習者のアカデミック・キャリア形成を考えるにあたり、最初に検討すべき指標は「日本留学試験」の日本語シラバスである。この試験は、日本の高等教育機関 (特に大学学部) に外国人留学生として入学を希望する者が、大学等での勉学・生活において必要となる言語活動に日本語を用いて参加していくための能力をどの程度身につけているかを測定することを目的とする (詳細は、表 1 を参照)。この試験に合格することは日本語学習者が正規課程の学生としてアカデミック・キャリアを踏み出すための最初の関門となり、受験のための日本語教育および支援は、多くの場合、語学学校等の予備教育機関を中心に行われている。

尹智鉉・寅丸真澄／早稲田大学の日本語学習者が育むべき「アカデミック・コンピテンシー」とは何か

表 1 日本留学試験の概要（日本学生支援機構）

問題領域	問われる能力
1. 読解, 聴解, 聴読解領域	読解, 聴解, 聴読解領域では, 文章や談話音声などによる情報を理解し, それらの情報の関係を把握し, また理解した情報を活用して論理的に妥当な解釈を導く能力が問われる。 ア) 直接的理解能力: 言語として明確に表現されていることを, そのまま理解することができるかを問う。 イ) 関係理解能力: 文章や談話で表現されている情報の関係を理解することができるかを問う。 ウ) 情報活用能力: 理解した情報を活用して論理的に妥当な解釈が導けるかを問う。
2. 記述領域	記述領域では, 「与えられた課題の指示に従い, 自分自身の考えを, 根拠を挙げて筋道立てて書く」ための能力が問われる。

日本留学試験において「アカデミック・ジャパニーズ」という名称を用いることにより, 「大学教育における留学生の日本語能力」を日本語教育の中の一つの領域として特化したことには成功した。しかし, その内容については, 結果的に「問題提起」にとどまり, その後の議論を呼ぶこととなった(森 2005)。門倉(2003)は, 日本留学試験の「日本語シラバス」の諸規定は言語テスト一般のあり方を羅列した, 抽象的で一般的な記述が大部分を占めており, 肝心のアカデミック・ジャパニーズのあり方を示唆する箇所は少ないと指摘している。

実際, 今回の文献調査(2)において各種データベースから「アカデミック・ジャパニーズ」が主題, 副題, キーワードのいずれかに含まれている論文を集め, 本文の該当部分を確認してみた結果, 日本語学習者のキャリア支援という観点から参照可能な, 汎用性のある定義を見つけることはできなかった。その理由は, 多くの論文が「日本留学試験」に書かれている通り「大学教育における留学生の日本語能力」としか概念の提示をしておらず, または「大学での勉学を目的とした日本語」であると, 狭義での意味としてのみ捉え, その範囲内で検討を行っていたからである。

そこで本調査者らは, 日本語学習者のアカデミック・キャリア形成という観点から, 日本の大学教育で問われている「学士力」からの考察を試みた。文部科学省(2008)の『『学士課程教育の構築に向けて』中央教育審議会答申』では, 学士課程共通の学習成果に関する参考指針として各専攻分野を通じて培う学士力の概要が示された(詳細は, 表2を参照)。国として学士力の概要を明確に示したのは, 学士課程で育成する21世紀型市民の内容(日本の大学が授与する学士が保証する能力の内容)に関する参考指針を明らかにし, 各大学における学位授与の方針等の策定や分野別の質保証の枠組みづくりを促進・支援するためであった。

表2 学士力に関する主な内容（文部科学省 2008）

1. 知識・理解	専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する。 (1) 多文化・異文化に関する知識の理解 (2) 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解
2. 汎用的技能	知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能 (1) コミュニケーション・スキル：日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる。 (2) 数量的スキル：自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる。 (3) 情報リテラシー：情報通信技術（ICT）を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。 (4) 論理的思考力：情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる。 (5) 問題解決力：問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる。
3. 態度・指向性	(1) 自己管理能力：自らを律して行動できる。 (2) チームワーク、リーダーシップ：他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる。 (3) 倫理観：自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる。 (4) 市民としての社会的責任：社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる。 (5) 生涯学習力：卒業後も自律・自立して学習できる。
4. 統合的な学習経験と創造的思考力	これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力

政府主導によって各専攻分野を通じて培うべき学士力が提示されるに至った背景には、グローバル化する知識基盤社会において学士レベルの資質能力を備える人材養成が重要な課題であることと、他方では、目先の学生確保が優先される傾向がある中、大学や学位の水準が曖昧になったり、学位の国際的通用性が失われたりしてはならないことへの認識があったとされる。このような趣旨から考えると、学士力の主な内容である「1. 知識・理解」「2. 汎用的技能」「3. 態度・志向性」「4. 統合的な学習経験と創造的思考力」は、日本の大学で学ぶ日本語学習者にとっても涵養すべき能力・資質であることに違いない。さらに、日本語学習者が日本での継続的なアカデミック・キャリアを志向し、実際にキャリアを形成していくためには、学士力で謳われている能力・資質の涵養が欠かせない。このような観点から、次項では、日本語学習者が日本の高等教育機関において育むべき能力・資質として「キー・コンピテンシー」について考察する。

#### 4. キー・コンピテンシーの涵養と CJL における人材育成

日本は2000年以降、OECDによる国際生徒の学習到達度調査（PISA: Programme for International Student Assessment）に参加し、PISAにおいて提示された「リテラシー」の概念を教育現場で積極的に取り入れてきた。PISA調査で応用力と活用力の不足という結果

尹智鉉・寅丸真澄／早稲田大学の日本語学習者が育むべき「アカデミック・コンピテンシー」とは何か

を受けたことから、リテラシーの重要な側面である「応用力」,「活用力」,「批判的読み」を核に据えた「生きる力」の育成が強調されるようになった。

また、知識が社会・経済の発展を駆動する基本的な要素となっている「知識基盤社会」といわれる現代社会においては、知識の急速な進展に伴って生じる様々な変化に対応していくための力量として「幅広い知識・柔軟な思考力・判断力」が不可欠とされている。単なる知識や技能だけでなく、高次の認知能力、パーソナリティや価値観、態度や動機づけなど、人間の全体的な能力を含む「コンピテンシー」が今を生きる力として求められるようになってきた(松下 2010)。また、OECD の最終報告書(2005)では、「人生の成功」と「常に正常に機能する社会」を構築することを目的としたコンピテンシー総体として「キー・コンピテンシー」の概念を定め、三つの広域カテゴリーとそれを構成する9つの具体的カテゴリーを示した。詳細は、図1の通りである。

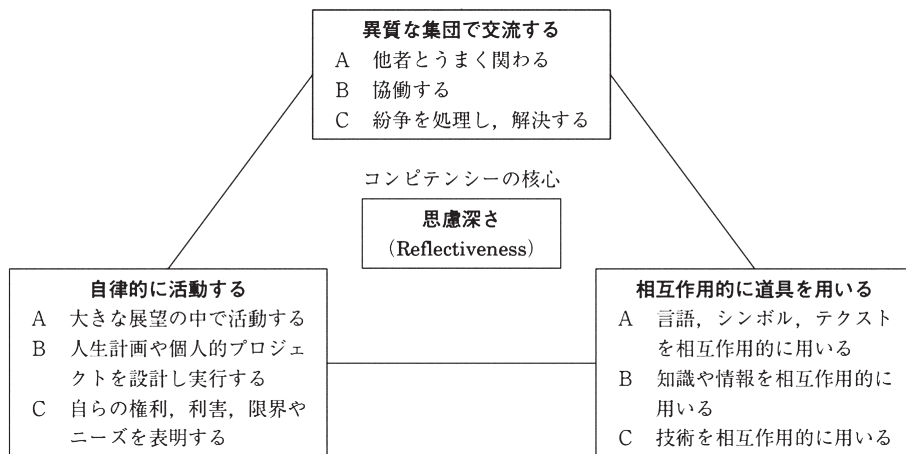


図1 キー・コンピテンシー (ライチェン&サルガニク (著), 立田慶裕 (監訳) 2006)

以上のような、世界の高等教育機関をめぐる今日の時代的・社会的要望に応えるべく、早稲田大学は、創立150周年へ向けたビジョン(Waseda Vision 150)のなかで、「Vision 1 世界に貢献する高い志を持った学生」「Vision 2 世界の平和と人類の幸福の実現に貢献する研究」「Vision 3 グローバルリーダーとして社会を支える卒業生」を掲げている(早稲田大学ホームページ「Waseda Vision 150 について」)。世界の様々な地域、社会に貢献する人材を輩出し、そのなかで一人一人が自己実現と社会貢献を果たしていくための教育と研究、そのための大学としての役割に関するビジョンを示したものである。これは、OECD (Organization for Economic Co-operation and Development, 経済協力開発機構) が定めたキー・コンピテンシーの枠組みと合致し、国際社会の動向とも一致するものである。

こうした本学の取り組みにおいて最重要キーワードの一つが国際化であり、留学生教育という側面から本学の国際化の一端を担っているのがCJLである。CJLは本学における日本語教育を一元的に担っている教育機関として、留学生数の増加だけでなく、その内実の多様化を目指している。言い換えると、CJLには人間力・洞察力を備えたグローバルリーダーを育成、輩出するという組織的使命があり、これはCJLの各種ポリシーからも



確認できる（早稲田大学日本語教育研究センターホームページ「日本語教育プログラムを知る」）。CJLの「ディプロマ・ポリシー」と「カリキュラム・ポリシー」はその使命の達成を志向したものであり、これらのポリシーに準拠した人材育成、すなわちCJLにおける教育・支援は以下を志向すべきであると考ええる。

- (1) 学習者自身が自らの学びを継続させることを可能にする教育・指導
- (2) 協働学習を通して各々の学習者がお互いの興味を理解し認め合うこと、さらに、共通理解や価値の共有化が促進される教育・指導
- (3) 教室内外の社会的文脈や状況において発現する学習者一人一人の独自性とその可能性に着目して行われる教育・指導

そしてCJLには「サポート・ポリシー」が存在する。CJLの学習支援に関する方針であるサポート・ポリシーを具現化するためには、CJL内外の〈人材〉と〈知財〉をつなげること、そのつながりから、充実した〈リソースの提供〉と〈学びの場づくり〉を実現することが重要である。

## 5. まとめ

本稿では、早稲田大学で学ぶ日本語学習者のアカデミック・キャリア支援のためのコース開発における第一歩として実施した文献調査の結果を踏まえ、CJLで学ぶ日本語学習者を対象とした、必要かつ実現可能な教育・支援のあり方について考察を行った。

日本語教育で育むキー・コンピテンシーがなぜ重要か。まず、日本語学習者のアカデミック・キャリア形成を支え、各々の自己実現を可能とするからである。次に、未知への挑戦が課題となり、人間の英知が問われる今日の社会において社会と世界に貢献していただける人材の輩出につながるからである。

さらに、本学における日本語学習者のキャリア教育・支援の目的は、言うまでもなく「新たな知の創出」と「世界に通用する人材の育成」にある。グローバルリーダーが課題解決のプロセスを進めるために起こすべき行動として問題の再認識が挙げられる。解決したい問題や実現したい未来を課題として設定すること、個人や組織において、その問題意識を「ことば」にしていく作業によって他人や他の組織に問題意識を伝えることが可能になる。その結果、互いの誤解やミスコミュニケーション、認識のずれを解消、改善することが可能になる。今後は、これらの理論的枠組みのなかで具体的な科目設計を行い、「CJLから専門教育へ」「Wasedaから社会へ、世界へ」と、橋渡しのための日本語教育を実践し、そこで得られた知見を教育現場に還元することに努めたい。

**付記：**本稿は、2020年度早稲田大学日本語教育研究センター研究プロジェクト「留学生のアカデミック・キャリアおよびビジネス・キャリア支援のためのコース開発」の研究成果の一部である。

## 参考文献

門倉正美（2003）「アカデミック・ジャパニーズとは何か」『日本留学試験とアカデミック・ジャ

尹智鉉・寅丸真澄／早稲田大学の日本語学習者が育むべき「アカデミック・コンピテンシー」とは何か

パニーズ』14-16.

金子勉（2009）「大学論の原点：フンボルト理念の再検討」『教育学研究』76(2), 208-219.

日本学生支援機構「日本留学試験シラバス（出題範囲）」（最終閲覧日：2020年9月15日）

[https://www.jasso.go.jp/ryugaku/study\\_j/eju/examinee/syllabus/index.html](https://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/eju/examinee/syllabus/index.html)

松尾知明（2015）『21世紀型スキルとは何か：コンピテンシーに基づく教育改革の国際比較』明石書店.

松下佳代（2010）『〈新しい能力〉は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房.

森朋子（2005）「大学教育における『アカデミック・ジャパニーズ』を考える」『東京家政学院大学紀要』45, 117-122.

文部科学省（2008）「『学士課程教育の構築に向けて』中央教育審議会答申」（最終閲覧日：2020年9月15日）

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm)

ライチェン・ドミニク, サルガニク・ローラ（著）, 立田慶裕（監訳）（2006）『キー・コンピテンシー：国際標準の学力をめざして』明石書店.

早稲田大学ホームページ「Waseda Vision 150 について」（最終閲覧日：2020年9月15日）

<https://www.waseda.jp/inst/vision150/about/vision>

早稲田大学日本語教育研究センターホームページ「日本語教育プログラムを知る」（最終閲覧日：2020年9月15日）

<https://www.waseda.jp/inst/cjl/applicants/launch/policy/>

OECD（2005）*The definition and selection of key competences: Executive summary*. OECD.

（ゆん じひょん, 早稲田大学日本語教育研究センター）

（とらまる ますみ, 早稲田大学日本語教育研究センター）